昭和二十六年一月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可　（第二十八号）

慈光

第三卷・第七號

目次

心を弘誓の佛地に樹て念を難思の法海に流す……花田正夫（1）
歎異抄十六章講話……福島政雄（3）
聞光錄……故・清水清吉（11）

心を弘誓の佛地に樹て
念を難思の法海に流す

花田正夫

今から四百年昔、ドイツ（ポーランド）にコペルニックスが出て、有名な地動説を唱へた。次いで伊太利に実験科学の祖と讃へられてゐるガリレイが出て、それを実証して世界に発表した。然しそれまでの人達は大地は平面で無限にひろがり、日も月も星も大地のまはりを繰つてゐるものとばかり信じてゐたのに、大地は球狀であり、太陽のまはりを月も星も大地も回転してゐるといふ発表を聞いて驚異と恐怖におちた。又天国は天上にあり煉獄は地下にあるとのみ信じてゐた基督教徒から非常な迫害をうけて二人ともに不遇の中に死んでいつた。

然し現在では地動説は萬人の認めるところとなり、太陽系中心の天文学は長足の進歩をして、四季の順還から日蝕月蝕の時刻まで明らかに予測出来るやうになつた。

この科学の進歩発達に比して、精神界には未だに地平説や、天動説、即ち大地は不動であり、一切の天体は大地を中心に動いてゐると言ふに等しい思想がそのままに認められ、常識化されてゐることはまことに歎かはしい次第である。

即ち我々の賢げな判断は、飽くまでも自我中心に終始してゐて、妄念のはてしない曠野を無限に流浪して居りながら、自らはそれを正なり是なり善なりと思ひこんで平氣でゐる。他人はいざ知らず私自身は肉親の親をさへ火鉢あつかひしか出来ぬ。即ち火鉢は冬は坐敷の眞中に出し、夏は物置に入れて省みないやうに、自分に都合のよい時は親の御蔭と思ふが、自分の考へに反対されると老人は頑固で思想がおくれてゐると省みない。然もそうした人間あつかひも出来ぬ、道具あつかひをしてゐると知りながらそのことが改められない。そのことは独り親に対してばかりでない。人と物とを問はず自我中心の想ひと行ひしか出来ない。然もその自己が時と所によつて変化するのであるから、不確かな判断と浮雲の想ひに終始してはてしがない。だからつまづき、苦しまねばならぬ。

かかる地球中心思想、即ち自我中心にこりかたまつてゐる我々の前に、七百年の昔から

慶しきかな。心を弘誓の佛地に樹て、念を難思の法海に流す。深く如来の矜哀を知りて、まことに師教の恩厚をあふぐ

慶喜いよいよ至り、至孝いよいよ重し云云。

と、親鸞聖人は満心よろこびにあふれ、随喜おくあたはぬ御述懐を教行信証の結びに誌されてゐる。謹んで祖師の御心を仰ぐに、空に高く聳える大樹が大地に広く深く根を下してゐる如くに、聖人の御心は老少善悪の凡夫をえらび給はぬ弘き彌陀大悲の誓願の大地に深く広くおろしてゐられる。又よろづの河川の水が大海に流れこんで淨化せられては一味の潮に転ずるに似て、聖人の一切の御念ひは、不可思議な彌陀佛の大願海にひたすら注ぎこんでゐられる。聖人の御生活は、佛心を大地とし、佛願を大海として、そこに樹ち、そこに帰つてゐられることを明らかにうかがひ奉ることが出来る。

斯様に天動説が崩れて地動説が樹立されたやうに、聖人の御生活は「ひとへに他力にして自力をはなれる」、即ち「人動説から佛動説」に転入せられてゐる。

佛心を中心と仰がれるが故に、自我中心の一切の言行は「そらごとたわごと、まことあることなき」を自照せられ、自我中心のあさましい生活から微塵も動きのとれない身には、ひとへにかかる虚仮不実の者の故に飽くまでも攝取して捨て給はぬ佛の御誓ひ一つにたすけられ、他の人々も亦広大無辺な佛の願力一つにたすけられまゐらす外に絶えて道はないことを信証せられてゐる。佛心に統一せられ調和せられた御生活が聖人の御生涯であつた。「夫れ菩薩の佛に帰するは、孝子の父母に帰し、忠臣の君后に帰して、動靜おのれに非ず、出沒必ず由あるが如し」との曇鸞大師の御言葉を身髓に徹して味つてゐられるのも自然の至情である。

さて佛心への転入、それは我々にとつては大変な出来事である。「廻心といふはただ一度あるべし」と言はれる廻心である。宗教心理学者ジェームスは「二度生れの人」と言ふ表現をしてゐる。我々が生れ出て本能の趣くままに自我中心の生活をしてゐる者が、佛界に転入せしめられて、甦生の生活が生れる、これを二度生れと呼ぶのである。破壊と建設、命終と即生が同時に成就せられるのである。生活の革命である。これをきざみとして佛心に照護せられて、現実の生活のままに淨土の大会衆の教に入り、生命終ると共に佛果を証せしめられるのである。

然し佛心への転入は、佛の大悲心の徹到による。「山に入る者は山を見ず」のことはざ通り、自我中心にのみ始めから閉ぢこもつてゐる者は、常にそれを是とし正として、そのことがそらごとたはごとまことあることなきを自覚出来ない。だから自分の考へに異なるものを聞いても受け容れないで、石が水をはねかへす如くである。然し絶えずやまず水滴の落下するところにやがて岩をも穿つて行くやうに、頑迷固陋の我等も、これを悲しみあはれみ給うて、倦むことなく絶えることなき無限の佛の大悲心は必ず遂には徹到するのである。

某少年收容所に一人の問題の子供が收容せられた。其子の父が毎日のやうに訪づれて色々と励まし慰めてゐた。然し他の少年達が或はうらやみ、或はあざけるのでその子は父の来ることをさけるやうになつた。然し父は相変らず日課のやう

に通ひ続けた。そのうちに秋も去り冬となつて大雪の日が来た。少年は今日こそは父は来ないだらうと内心安心してゐると難儀をしながら父が訪づれた。風邪もひかず元氣な子供を見て父は安心したが、フト見ると寒い廊下に素足のままで立つてゐるので、そのわけをたづねると、朝の掃除の時に足袋が水にぬれたとのことであつた。早速父親は自分のはいてゐた足袋をぬいで少年に與へて自分は素足のまま大雪の中を立ち去らうとした時、うしろから少年が「お父さん」と叫んだ。驚いて少年を見ると少年は兩眼に一杯涙を浮べて「お父さん、あんたは、そこまで僕が可愛いのか」と素足の父の姿をみつめて驚嘆した。そのことがあつて以来、昔ながらのすなほな子心に帰つたとのことである。

私はこの実話を聞かされて身に滲み透るものがある。妄念を自体とした、自我中心の私に、ひとへに注ぎ給ふ、如来の矜哀と、師教の恩厚の深さ重さである。南無阿彌陀佛。然しそれによつて自分が立派な問違ひのない人間になれるのではない。むしろ佛心に照らされるが故に我身のあさましさが照らされ、照らされるが故に愈々佛恩の深きを仰ぐばかりである。

歎異抄第十六章講話

福島政雄

第十六章

信心の行者、自然にはらをもたて、あしざまなることをもおかし、同朋同侶にもあひて口論をもしては、かならず廻心すべしといふこと、この條断悪修善のここちか。

一向専修のひとにをいては、廻心といふこと、ただひとたびあるべし。その廻心は、日ごろ本願他力眞宗をしらざるひと、彌陀の智慧をたまはりて、日ごろのこころにては往生かなふべからずとおもひて、もとのこころをひきかへて、本願をたのみまゐらするをこそ廻心とはまうし候へ。

一切のことに、朝夕べに廻心して、往生を遂げ候ふべくは、ひとのいのちは、いづるいきいるをまたずしてをはることなれば、廻心もせず、柔和忍辱のおもひにも住せざらんさきにいのちつきば、攝取不捨の誓願は、むなしくならせおはしますべきにや。口には願力をたのみまつるといひて、心にはさこそ悪人をたすけんといふ願不思議にましますといふとも、さすがよからんものをこそたすけたまはんずれと、おもふほどに、願力をうたがひ、他力をたのみまゐらするこころかけて、辺地の生をうけんこと、もともなげきおもひたまふべきことなり。

信心さだまりなば、往生は彌陀にはからはれまゐらせてすることなれば、わがはからひなるべからず。わろからんにつけても、いよいよ願力をあほぎまゐらせば、自然のことはりにて柔和忍辱のこころもいでくべし。すべてよろずのことにつけて、往生はかしこきおもひを具せずして、ただほれぼれと、彌陀の御恩の深重なること、つねにおもひいだしまゐらすべし。しかれば念佛も申され候、これ自然なり。わがはからはざるを自然と申すなり。これすなはち他力にてましまし。

しかるを自然といふことの別にあるやうに、われものしりがほにいふひとのさうらふよしうけたまはる。あさましくさふらうなり。

歎異抄第十六章は、私として近年、殊に此の十年近く段々と有り難くなつた章である。はじめは此の章にあまり感じを持たなかつたのが、次第にしんみりと感ぜられるやうになつた。

此の章の中心として味はれるのは「自然」といふことと「廻心」といふこととである。自然と言つても二様に用ひられてゐて「自然に腹をも立て悪しざまなる事をもをかし」と言つてある自然といふ言葉の心持と、「自然の理にて柔和忍辱い心も出で来べし」と言はれる時の自然といふ言葉の心持とは違つてゐる。

此の章の何処を私が最も有り難く感ずるかと言へば「信心定まりなば往生は彌陀に計らはれまゐらせてすることなればわが計らひなるべからず、悪からんにつけてもいよいよ願力を仰ぎまゐらせば自然の理にて柔和忍辱の心も出で来べし」といふ一節である。

さて此の柔和忍辱といふ言葉が此の章では二箇所に出て来るが、私自身姿も心も柔和忍辱になれるかといへばなかなかさうはなれないのである。廻心すれば柔和忍辱になれるやうに言はれてあるが、私としてはなれないといふことを自分の実際の上でつくづくと感じてゐる。それについて私の廻心のことを先づ申述べて見たい。廻心といふことはただ一度である。私は二十六歳の夏に廻心した。その廻心といふのは、自分で自分を反省して見たといふことでもなく、自分の善根功德を廻らし向けて佛陀の前に差出すといふやうなことでもない。親鸞聖人は如来廻向、即ち佛陀がその広大無辺の御慈悲を以て佛陀の一切の善根功德を私共の方に廻らし向けて私共に賜はるのであると言はれる。それは常識道德から見れば正に百八十度の転回ともいふべきことであつて、そんな心の経験は一生に一度あるばかりである。「日頃の心にては往生かなふべからずと思ひて本の心をひきかへて本願をたのみまゐらするをこそ廻心とは申し候へ」とある通りである。

私は幼少の時には佛教への御縁は無かつた者で、佛教のお話をきいたことも殆ど無く、ただ青年時代に日蓮上人関係のものを読んだりしてゐたもので、お念佛などはわからないのに軽蔑してゐたものである。それが二十六歳の時から不思議の御縁によつて近角常観先生の御法話を聞き、本願の旨を聞くやうになつて思ひもよらずその夏の七月十一日から一転して来たのである。それまでの私は何もわかつてゐないのにお念佛をけなしてゐた。お念佛などは死にかけた老人には必要であらうが若い自分には何の必要もないと考へてゐた。然るに既にその年の三月に先生の信仰上のお話を聞き始めた時から私は自分の姿に目ざめ始めてゐた。

それまでの私はよほど自分を立派な者と思つてゐて、一歩一歩、一日一日に理想に向つて進んでゐるものと思つてゐた。自分は立派にやつてゐるのに他人が之を認めてくれないといふ淋しさを胸に抱いてゐた。これが近角先生の仰せられる五分五分根性であるとわかつて来た。即ちこちらから五分だけよくしてやれば相手からも五分だけ善いことを返してくれる筈だといふ心である。かやうなところから私は自分の五分五分根性の姿に氣がつき始めた。かうなつてくると今まで自分が善いと思つてゐたことが怪しくなつて来た。そこで自分が非常に淋しくなつて来たのである。二河喩（ニガユ）の中の旅人が空曠の荒野に来て道行く人は一人もなく自分ひとりで非常にさびしいといふ、丁度その通りであつて、人生は寂莫たるものであると思ふやうになつた。聖書の中に「我この世を何にたとへんや、童子街に坐し其侶を呼びて、われら笛ふけどもなんぢらをどらず、哀しみをすれどもなんぢら胸打たずと云ふに似たり」とあるが、私の心の淋しさはさういふ感じであつた。若い時のことであるから感じは鮮やかであり、淋しいと思へばその淋しさが全身に染み込んで来るやうであつた。たとへば空はどんよりと曇つてゐて、晴々としたところは何処にもなく冬枯の淋しい野の路を自分一人とぼとぼと歩んでゐるといふやうな感じであつた。

それまでは自分は善いと思つてゐたから張合があつたが、それが怪しくなつて自分も悪いとなつて来ると張合は全く無くなつた。私は元来感傷的（カンショウテキ）な性質であるので、人生といふものはこんなに淋しいものか、これではたまらぬと感ずるやうになつた。それからの私は美しい自然の景色を見てもひがんだ心で見るやうになり、美しい富士山を見ても、これも無常流転の存在に過ぎないなどとひがんで考へるやうになり、その美しさを素直（スナホ）に感ずることが出来ないやうになつた。従つて人間に対してもひがんで隔て心を持つやうになつた。学校で生徒が私を先生と呼んでなつかしさうにしてくれると、私の方では、自分は先生などと呼ばれる価値がないといふひがみ心が起る。親に対してもひどくひがんで、親の方から心配して結婚の話を持ち出してくれても、それを素直（スナホ）に受け容れないといふ風で、親に対して沈默の反抗とでもいふやうな有様で、郷里熊本から東京へ行つてしまうたりした。そして人生はいよいよ淋しくてたまらぬといふやうな心持になつた。

斯様な有様であつた頃、お念佛に対する軽蔑の心持を友人に話したところ「それはまちがつてゐる。親鸞聖人の教が田舎の純眞な人にどんなによくひびいてゐるかを見るがよい」と友人は言つてくれた。一方ではそれまで日蓮聖人に対する一種の感激を持つてゐたが、学校の教員室でいつも私の右側の席に居られた守屋貫教といふ方から大きな影響を受けた。此の守屋氏は立派な人物で、日蓮宗の人であり、私よりもよほど先輩で私が中学を卒業した年に大学を卒業した人であつたが、此の方が「自分は日蓮聖人に親鸞上人の趣を発見することを一生涯の仕事としてゐる」と言はれてゐた。もはや数年前に六十餘歳で亡くなられ、実に惜しいと思つてゐる。私は今でも此の守屋氏を敬愛し、その六十餘歳の逝去をまだ早過ぎたと思つて惜しんでゐる。

元来日蓮上人の流れを受けてゐる人々が二通りに分れてゐるやうである。即ち上人の前半生の勇ましい面を受けてゐる人々と、身延入山以後のしつとりとした面を受けてゐる人々とである。深草の元政などといふ人はしつとりとした面を受けた人である。私は此の元政上人の草山集といふ詩集を時々開いて読んで見る。母親に孝をつくした人で草山集には「母を憶ふ」とか「母の至るを喜ぶ」とかいふ詩があるが、私はそんな詩を喜んで読んでゐる。守屋氏はやはりしつとりとした面を受けた人で元政上人とか又明治の初頃の人であつた日薩といふ人のものをよく味つて読んでゐられたやうである。此の守屋氏は時々私に向つて、当時の日蓮主義をとなへてゐる人々の心持が宗教的でなくて一種の国家主義になつてゐることを慨嘆された。法華経の寿量品を一筋に立ててこそ宗教になる。所謂日蓮主義は方便品を理窟で説いてゐるばかりである。あれでは宗教にならないといふことをよく言はれた。

此の守屋氏の言が又私の身にしみた。私は自分も理窟ばかり言つてゐると感じて来た。かやうにして私には友人や先輩の導きによつて、やがて近角先生の信仰上のお話をきく準備がいつのまにか出来てゐたと思はれる。

近角常観先生の夏季求道会、それは七月上旬の一週間ほどであつたが、その間に私の淋しい心の奥にどこからともなく光がさして来たのである。それを私が自覺したのは七月十一日の夕方、星が輝きそめる頃であつた。寂莫の人生をただひとり歩んでゐる此の私を、底の底まで先方から見とほして、その淋しさに無限の同情をそそぎたまふ、その佛陀の無限のまことが私のいのちを貫いて下さる。そこに私が無限の慈悲を感ずる。広大無辺なる御慈悲のいのちが私のいのちに通ひ、私のいのちにひびく、無限に溫かいまことのいのちに包まれてゐる。これがその当時にはじめて開けた私の感じである。廻心といふことただ一度あるべしとは此の事であると私は感じてゐる。如来の本願などといふことを少しもわからなかつた私が、思ひがけなくも此の時に目をさましていただいた。それが一生涯にただ一度の不思議の体験であつた。

ただ一度（ヒトタビ）の廻心といふものは反省といふことではちがふ。反省といふことはあてにならない。反省したり無反省になつ

たりするのが私の現実生活の有様である。然るに廻心といふことただ一たびあるべしといふのは、そのただ一度の廻心が一生を貫きとほすのである。広大な佛陀のまことが私のいのちに通つて、それが永遠にひびくのである。私自身はそれから後も忘れ勝になる。常住に佛陀の前に目がさめてゐるのではない。むしろ眠つてゐることが多い。併し眠つてはならぬと自ら励むのではない。先方から折にふれて私を呼びさまして下さるのである。折にふれてといふのは私が現実問題に当面して躓いた時などである。そこに私は佛陀の御呼び声をきく。目をさまされる。先方から私のいのちを包んで一貫してまごころを以て向つてゐて下さるが、私の方からは氣がつかないでゐることもある。

「一切のことに朝夕に廻心して」とあるが、さやうの廻心はない。それは廻心とは言はない。反省とでもいふべきものであらう。反省には限りがある、私には無限の反省などは出来ない。反省も結局は行きつまる此の身に無限広大のまことが常住にひびいて来る。それはただ一たびの廻心の無限の餘音ともいふべきであらう。私が此の世のいのち終るまでその餘音は力強くひびく。それは底力強い餘音であり、そこに私の念佛称名がある。

併しながらただ一たびの廻心に伴ふ恍惚たる境地をつかんで、それで万事成ると思つたならば非常な誤りに陥る。私は実際その誤りに陥つたのである。それは信仰といふことについての自分の計ひに陥つたのである。「自分は二十六歳の夏七月信仰に入つた。それで人生の万事は解決した」といふやうな計ひ心が起つて来た。それは信心の花が開けた根源を忘れて自分の手柄のやうにおもひ、信心の貝殻とでもいふやうなものをかぶつて非常に傲慢になつて来たのである。そして信仰の押売りとでもいふやうな態度が十年ばかりも続いたと思ふ。信仰だ、信仰だといひながら私は空虚な年月を送つて来たのである。

ここに蓮如上人に対する私の心の関係を少しく申し述べて見たい。私は蓮如上人にはなかなか親しめなかつた。最初は蓮如上人の御文を読むと反感が起つた。高座の上からおしつけるやうに「こころうべきものなり」とか「おもうべきものなり」とか言はれるやうで、私は自分をきめつけられるやうな氣がする。蓮如上人といふお方はいやなお方だと思つてゐた。ところが御一代聞書を読み始めてから私の心持が変つて来た。蓮如上人に対して親しみを持つやうになり思ひ直すやうになつた。御一代聞書を繰り返し読んで歎異抄も繰り返してゐる間に、御文の中の「すべきものなり」が氣にかからぬやうになつた。併し御一代聞書にあるやうなことが、私に実行出来るかといふと少しも実行は出来ない。「信を得たらば同行にあらく物も申すまじきなり。心和ぐべきなり。触光柔軟の願あり」といふ御一代聞書のお言葉は耳に止まつてゐながら、私の短氣の性質は直らない。広島にゐた頃、或る時間の講義が終つた時、学生が私のところに来て質問をした。日蓮上人のことをたづねた。私がそれに答へると、学生の方から

らしつこく言ひ返しをする。その時私はかつと怒つてしまつた。その学生は「佛法をとやかく言ふ人があんなに怒るやうでは駄目だ」と言つて、それきり私と絶交してしまつた。かやうな失敗を私は幾度か繰り返してゐる。私には柔和忍辱といふことが全くない。尤も顔附や態度は如何にも柔和なやうに見えると他人からは言はれるが、根本の性質がその反対であるから、羊の皮をかぶつた狼のやうなものである。それで「信心定まりなば往生は彌陀に計らはれまゐらせてすることなれば、わがはからひなるべからず。悪からんにつけても、いよいよ願力を仰ぎまゐらせば」といふところまでは素直に受けることが出来るが「自然の理にて柔和忍辱の心も出でくべし」といふところになると考へさせられる。私に柔和忍辱の心はない。併し「自然の理にて」とある。此の自然は佛陀の願力の自然である。佛陀大悲のいのちから無理なく流れ出て来るのである。所謂自然法爾である。さすれば柔和忍辱の心のない此の私の胸に佛陀大悲の柔和忍辱の御いのちがひびいて来るのである。出で来るのは佛陀大悲の柔和忍辱であつて、私は私の胸にそれを感ずるのである。

そこで信仰と道徳といふ問題になつて来る。宗教を信じて来れば、道徳上立派な行が出来ると普通には考へられてゐる。人を批評してあんなに行が乱れてゐて信仰があるなどといふのは嘘だと言ふ。併し私は力んで善を励むといふやうなことは出来ない。私は自分で力んで我慢して誘惑に打勝つたと思ふ瞬間には必ず誘惑に負けてゐる。誘惑に対して頑張つても駄目である。

或る時近角先生に此の事をおたづねしたところ「それは誘惑のある方へ行きたくてたまらず引張られてゐる自分が、佛陀の御慈悲に融かされて遂に誘惑の方を思ひきるやうになるのである」と仰せられた。それは先生の仰せられる通りであると思ふ。併し私は宿業といふことを痛切に感ずる。ただ一度の廻心といふことはありながら宿業に催されて私は幾度人間としての躓きを重ねて来たことか。悪しからんにつけてもいよいよ願力を仰ぎまゐらするといふことが、私においてはいつも暗い宿業にひかされた後の事となつてゐる。眞諦門、俗諦門といふことはやかましいことになつてゐるが、眞諦門に入れば俗諦門が容易に行はれるといふ経験は私には無い。むしろ俗諦門を行ふことの出来ないことがわかる時、眞諦門が開かれてゐる。道徳に躓いて宗教の門に入る。その躓きは一生涯の躓きである。念佛は妄念の中の念佛である。臨終の時までは一向妄念の凡夫と言はれてある横川法語がなつかしく感ぜられる。此の私の境地は親に甘える心かも知れない。妄念を断ぜねば駄目だと言はれるかも知れない。併し妄念のない境地は私が未だ味ひ得ない境地である。自然の理の柔和忍辱の佛陀の御心のままに打ちまかせて、我が妄念は「おこらばおこれとうちすてたまへ」と言はれる惠空師の御教に私は微妙の感銘を受けてゐる。その妄念の中に熾盛の願心が湧き立つて来ることを私は経験する。キリスト教の信仰の人から見らるれば此の点がどうも腑(フ)に落ちかねると言はれる。或る

時キリスト教会の副牧師をしてゐられた方が私に向つて「歎異抄ほど、信仰の境地をよくまとめて書かれたものはキリスト教の方にはない。併し歎異抄には信仰の上から履み行ふべき人間の道徳のことは少しも書かれてゐない、これが佛教の消極的なところで此の点を不満に思ふ」と言はれたことがある。それは私の廻心直後の頃で、私は之に対して何と答へて宜いかわからなかつた。大正の御代に伝育官長となられた三好愛吉先生にその事をおたづねした時、先生は「それが佛教の徹底的なところである。信心徹底の上においてはすべて佛之を爲さしめたまふのである。人間の道を一々煩雑に佛陀が規定される必要はない」と言はれた。それは佛凡一如の境地で私の心に痛快にひびき私は感激した。併し私自身の実際の歩みはそんなに痛快な歩みではない。躓き通しのやうな歩みである。

その後私は大無量寿経に少しづつ親しんで先づその下巻の悲化段とか五悪段とか言はれてゐるところに痛切に感ずるやうになつた。そして最初の頃は五悪段とキリストの山上の垂訓とを比較して何れも痛切な人生の教訓であり、同じ問題に触れたところがあるのを興味深く感じてゐた。そして佛典において人間の履み行ふべき道を示されたものとしては此の悲化段、五悪段こそ最もすぐれたものではあるまいかと考へてゐた。

併し十年も十五年もこれを繰り返して読んで味ひ、私自身の現実と照しあはせて考へてゐるうちに、私は山上の垂訓と五悪段との趣の違ふところをはつきりと感ずるやうになつた。キリストの山上の垂訓には兄が弟を誡めて之を笞打つやうな趣がある。理想主義の笞が打ち下される音がきこえる。婦人を見て色情を起すものは心中既に姦婬せるものである。若し汝の眼が汝を地獄に落すやうであつたならば目をくりぬいてしまへ。若し汝の手が汝を地獄におとすやうであつたならば手を斬つてしまへ。それは実に厳しい痛切な教訓であつて、青年時代の私を感激させた。然るに私が三十歳四十歳五十歳となつて来て、青年時の純眞さが無くなり、人生の躓きを重ねて来て見ると、自分は少しもキリストの教訓に副はないものであることがわかつて来た。而して五悪段の味ひといふものが染々と身にしみるやうになつて来た。

悲化段、五悪段を染々と繰返して味つて見ると、これは親が子にしんみりと言ひきかせてゐるといふ趣がある。親は佛陀であり子は私である。五悪の誡と言はれてゐるけれども、それは信心が開けての上で履み行ふべき人間の道を説かれたといふ意味合ひのものではない。浄土教における俗諦門の教といふものは、私がその教の道を履み行ふことが出来ないといふことを現実の上で知らせられ、私の如実の姿に目ざめさせられるといふ意味合ひのものである。私は五悪段を繰り返し読んで次第々々に自分の姿に目をさまされて来た。

五悪の第一は殺しあひである。残害殺戮と言はれてある。第二はだまし合ひである。心口各異、言念無実と言はれてある。第三は男女の欲の乱れである。但念嫉妒、愛欲交乱と言

はれてある。第四は権力欲をほしいままにすることで、尊貴自大、横行威勢と言はれてある。第五は放蕩無頼の生活であつて、放恣遊散、耽酒嗜美、飲食無度と言はれてある。この五ツの悪は転々増長するものであるが、私が自分の姿に先づ目ざめさせられたのは、第五の悪の最初のところからであつた。家業をつとめないで親に対して反抗するといふ自分の姿に先づ目をさまさせられたのであつた。

人間の悪行のあらゆる姿を細かに述べられてある。それらの悪行を止めて正しきにかへれといふ佛陀の言葉が一悪、二悪、三悪、四悪、五悪、それぞれの誡めのあとで述べられてある。即ち一心制意、端身正行といふ言葉である。併しこれは私としては出来ないことである。親鸞聖人はこれを佛陀の一心制意、端身正行として受けとられる。佛陀は此の言葉を述べながら、私が自分の行の上では到底この言葉に副ひ得ないことを見とほされてゐられる。そこに佛陀の慈悲の涙がある。私は五悪の誡めの全体を通じてそこに佛陀の涙を感じてゐる。懇ろに五悪を誡めて下さる佛陀の前にゐる私が、不図佛陀のお顔を仰げば、佛陀の御眼には涙が一ぱいにあふれてゐる。その涙が降りかかつて私の身にしみる。そこに一心制意、端身正行は佛陀の大行として私に廻向せられて来ることを感ずる。私自身はどこまでも五悪の姿である。その姿を見とほして無限のあはれみの涙を此の私のいのちにそそぎ給ふ。佛陀は私のために一心制意、端身正行したまふ。その佛陀の眞実生命に感じて私はいよいよ自分の姿が五悪の姿であることをしみじみとおもひ知るやうになる。私はその姿をそのままに佛陀の前に投げ出して日暮しをして行く。そこに涙のお念佛がある。

歎異抄には「自然の理にて柔和忍辱の心も出で来べし」とある。その自然とは佛の願力の自然である。その願力の自然の中には私の煩悩の全生活が見とほされて攝取せられて行く。私は逃げることも出来ない。そこに私の五悪煩悩の全生活が佛陀の慈悲のいのちに取攝せられ、私はそこに佛陀の一心制意、端身正行や佛陀の柔和忍辱の心を感ずる。ここに私の五悪煩悩の全生活がお念佛に融けて行く。私が善くなるとは感ぜられない、併し私が何となく融かされて行くのである。

斯様に言へば私が全く自分の悪を自覚したかのやうにきこえるが、さう単純には行かない。歎異抄第十六章の「さすが善からん者をこそ助けたまはんずれ」といふ言葉は私にとつて如何にも羨いところに手の届くやうな教であると感ぜられる。悲化段、五悪段で自分の姿を知らされても、本当に底の底から「自分のやうな悪人」といふ自覚が素直につづくかといふのに、やはり心の底のどこかに「さすが善からん者をこそ助けたまはんずれ」といふ感じが残つてゐる。それが折にふれて頭をもたげる。自分は善人だといふ顔をしたくなる。しんそこから自分は悪人だと感ずるといふことがなかなかつづかない。そこに佛の本願を素直に受ける心がつづかない。私を目あての本願に対して私の方から体をかはして之を受けないといふ態度になつて来る。併し太陽の光の中にある者が

いくら体をかはしても光の外に出ることが出来ないのと同じく、一たび佛光に照された私はどんなにしても佛光照耀の世界をぬけ出ることは出来ない。善人顔をしたい自分こそ一層佛の涙のかかつてゐる身であることを知らせられる。

そこで第十六章の終のところがまた実に有難いと感ぜられる。「すべて萬の事につけて往生には賢き思を具せずして、ただほれほれと彌陀の御恩の深重なることを常におもひ出しまゐらすべし。しかれば念佛も申され候。これ自然なり。」賢き思を具するといふのは反省によつて自分を善くして行かうといふやうなことである。それは駄目である。自分は反省して善くなるといふやうな人間ではない。此のやうな自分をどこまでもあはれんで悲しみの涙をそそぎたまふ彌陀の御恩、その御恩の深いことを常にほれほれとおもひ出しまゐらせるといふ。それは私がおもひ出しまゐらせるといふよりも先方からその深重のおもひを届けて下さる。私が人生の行路につまづいて苦しみ悩んでゐるやうな時には、殊に深重のおもひを私のいのちに通はせて下さる。そこに私のお念佛の生活がある。

自然といふ味ひは佛の眞実生命が無理なく私のいのちを包んで攝取して下さる味ひである。それは無量寿、無量光、無限の慈悲をもつて私をつつみ、無限の智慧をもつて私を照して下さるのである。私の方には力味もなく反省も無く、善いことをしたといふことも無くなる。煩悩の苦しみも迷ひも遂には大慈大悲の光の前に融かされて行く。その融かされて行くといふ時には、ほれほれと御恩の深重なることをおもふ思ひも湧いて来る。併しそのほれほれとする自分のおもひを捕へるのでもない。歓喜悲喜といふ自分の心を捕へるのでもない。自分の心は砂を嚙むやうな味氣ない有様であることが多い。併し如何なる場合をも通じて佛の願力の自然は此の私のいのちにひびいてゐる。その自然のままに生活させていただくといふところに歎異抄第十六章の結局の味ひがあると私は感じてゐる。

（昭和二十六年、五月廿二日稿了）

聞光録

清水清吉

清吉さんは「凡禿（ボントク）」と号されて、盛岡生れの盛岡育ちで、せまい盛岡で四十九年の生涯を終られました。言はば世間的には無名の一生を盛岡で過された方です。然し凡禿さんのあるところ、隣人はおのづからに喜びを知り、眼が開け、湧然として勇氣が生れ、潤然として道が拓けて、慈光に潤ほうて行きました。

惜しむべし、悲しむべし、昭和十七年の暮、持病の喘息のため、多くの法友に惜しまれ護られつつ往生せられました。

大願のふねは　あはてゝ要もなし
　ゆらるるままに　かぜのまにまに

は法友の最後の御見舞にこたへられた辞世の歌でありました。

凡禿遺稿集刊行会一同

○

眞面目に世の姿を見て行かうとすると、それでは世の中はとほるものではない。要領で行けと云ふ、そこに若人の反感が湧いてくる。眞面目でもゆかれず、要領でも進まれず、一体どこを歩めばよいのか。

そうだ。眞面目に世を見る前に、まづその眞面目さをもつて、自分を見るのを忘れてゐたのだ。

だが、自分の目で自分の顔を見たためしがない、自分の顔は鏡によつて始めて知られる。若し鏡に写る自分の姿を疑ふなら、永久に自分の顔を知ることが出来ぬのだ。

如何なる人でも絶対無限に対する時、そこに出て来る価値（ネウチ）は零（レイ）である。自分を零（レイ）と知らされてすべての人に対するとき、そこに出て来る答は無限大の力である。

昭、九、一〇月

○

願ひ！それは私にはなかつたのだ。目先の問題やら、順境やらに障へられて、なかなか眞実の願ひを見つけ得なかつたのだ。その願ひを私に代つて成就して、それを私にうけとつて呉れと願つて下さるのが佛様だ。私は願ふ身に非ずして願はれて居る身である。

昭、十、六月

○

私は常に、私のどうにもならぬ缺点を、これは私の性格である、と顎（アゴ）を出してうそぶく氣持がおこる。そうしたとき、たよりなき淋しさをしみじみと味はされる。そして私の強情我慢の我城の戸を堅く閉して、いつまでも開かれるときがない。

この缺点は私のどうしても、何ともされぬ私の性格であると地べたに頭をつけたときに、ほんとうに安らかな氣持になる。そしていつの間にか我慢の戸が開かれる。

昭、十、七月

○

判りきつた事がなかなか判らぬ。すべてを見るは我が目、我が目はこれ慾、慾から見るが故に眞実の姿を見得ぬ。眞実の姿を見ざるが故にものに躓（ツ）まづく、つまづくが故に苦しむ。ただこれだけのことがなかなか判らぬ。

いや判つてゐるのだが、それは頭だけの事で、慾から脱しきる事が出来ないのだ。慾から脱し得なければ苦しむより道

がない事、当然の帰結と云はねばならぬ。

私の道は唯苦しむ事、その当然さを明瞭に見さして頂き、そこに苦しみを受けてゆく力をいただいて歩むより外に道がない。

そは他なし、このことをかねて御見拔き下された、大願の業力に乘ずるのみ。

昭、十、十一月

○

すべてが刻々と変る、殊にも人の心の変りやう。その姿をまざまざと見せられつつも人に接するとき、過去のその人に対する印象を持続して、その人に当り、嫌悪し、或は警戒をする。故に、その人をしていやな氣持を起させ、或は其の人の御親切をそのままうける事が出来ずして自らをも苦しめる。

そこから悩みが生れ、又隔たりが生ずる。なかなか虚心胆懐になれぬを悲しむ。

何事の苦しき事ととふならば
人をへだつるこころとこたへよ

の良寛上人の歌が深く〳〵味はせられる。

昭、十一、二月

○

私は私の上に満たされぬものを悲しんで泣く。私の満たされぬものを満たされて居る人を見れば、泣いて居る人と見得ない。泣くのは、私の満たされぬ事に限るやうに思うて居る。だから、仲々他人様の愚痴を聞き得る餘裕を持ち得ない。そして狹い世界を造つて居る。他人様の愚痴を退けながらも、自分の愚痴を聞いてもらひ度い。何とした矛盾した事であらう。

今如来慈光の賜により、明らかに人の姿を見さして頂く時、貪、嗔、痴の三毒をもととしての生活であるが故に、満たされて居ると云ふ人のあり得べからざる事を知らしめて頂く時に、生きてゐると云ふそれが苦しんで居る事であり泣いてゐる事であると氣づかして頂く。それによつてはじめて自分に大きな問題をひかへて居ながら、他人様の愚痴もすなほに聞き得るゆとりある世界がひらける。

昭、十一、六月

○

佛様の教を聞かして頂く我が身が、法を汚すような行動を敢てして居るのを見出した時にたまらなく身に寒さを覚ゆる。佛法を世間の方々がいろいろ誹謗して居られるのを聞けば、大底法を謗るのではなく、法を聞いてゐる人を見て、それを通じて法を謗つて居る。私もさうしたことによつて法を障げて居ると思ふ時に慙愧に堪えない。

御消息集に「佛法を破る人なし、佛法者の破るにたとへたわには獅子身中の蟲の獅子をくらうが如しと候へば、念佛者

をば、佛法者の破り礙げ候ふなり、よくよく心得たまふべし。」よくも御親切にかゆいところに手の屈くやうに御注意して下さつた事であるとしみじみと拜まれる。

昭、十三、五月

○

毎日の様に多くの方々にお逢ひして居るが、一人一人に皆悩みを持つておいでになる。かく言ふ私もまた悩んで居る一人である。みな痛ましい姿である。親は子のために泣き、子は親のために泣く、一体これはどうしたものか、それを周囲に妥協してそつとして見すごしてよいものであらうか。

或る先輩が、人間が人間として生きてゆく根底を極悪深重の凡夫であると知らされなければ、到底人間が人間として生きて行けるものでないといふお言葉を思ひ出すが、まつたくその通りである。総ての事件の解決がここから出発しなければ徹底的解決とは言はれぬ。悩みそのものが一体どこから生れて来たのか、よくよくつよい御教の光に照らされて、まる裸の自分の姿に直面した時に、悩みの正体も判り從つて事件は春の雪のやうに解決するのではあるまいか。

昭、十五、二月

隨想

奈良林浄海

よろこべぬおのがこころのせつなさをあはれみたまふ久遠のみ光

我執あり我執ありとて捨てやらぬ大悲み親のふところになく

力なきおのがこころに照り透すみかけおもへばただなみだなり

大いなる光のまへにぬかづきておのがこころのみにくさをしる

あひがたき光にあひてかたくなのこころとろけてなみだあふるる

登山狀の拔文

法然上人

釈尊の在世にあはざる事はかなしみなりといへども、教法流布の世にあふ事をえたるは、これよろこびなり。たとへば目しひたる亀の浮木のあなにあへるがごとし。

それあしたにひらく栄華は、夕べの風に散り易く。夕べに結ぶ命露は、朝の日に消え易し。これを知らずしてつねに栄えん事を思ひ、是をさとらずしてつねにあらんことを思ふ。しかるあひだ無常の風ひとたびふきて有爲のつゆなかばねはつひに苔の下に埋もれ、たましひはひとり旅の空にまよふ。妻子眷属は家にあれどもともなはず。七珍万宝は蔵にみてども益なし。ただ身にしたがふものは後悔涙のみなり。

編集後記

眞夏の陽光が照りつける頃となりました。編集を終へました今日、貞明皇后様の御葬儀の日にあたり、遥かに東天を拜し奉つたことであります。大正天皇御崩御の後、二十五年の間、毎朝御靈前に數時間を御參拜遊ばされたとうかがひ奉るだに、涙こぼるることであります。終戰以来始めて津々浦々に至るまで御追慕の情こまやかなものを感知させられました。御德の自然の致すところであります。敗戰後、德とか信とかいふ言葉さへ忘れて匆々と生きることのみにかからはててすさびきつている我等に心溫まる大いなる燈火を掲げて下さいました。

▽福島先生の本年一月一道会館における數異抄第十六章の御講話は、廻心と自然といふことを中心に御法味を頒つて下さいました。原稿につきましても先生が全部御清書下さいましたことは感激に堪えませぬことであります「廻心と自然」ということは「入信と相続」と申してよいかと存じます。「廻心に伴ふ感激にうかれて、信心の花が開けた根源を忘れて自分の手柄のやうに思い、信仰だ、信仰だと云ひながら空虛な十年ばかりの年月を送つた」との御告白は、私のやりそこなひをそのまま知らせて頂く金言であります。

御住所、横須賀市田浦局区内、船越六六二番地であります。

▽聞光録は清水凡禿居士の遺稿であります。東京の出洲勝郎翁の御縁から盛岡市の法友法姉の御縁が結ばれ、清水未亡人初め海野里子姉を介して御遺稿を頂きました。今後も數回に亙りまして記載させて頂き法雨に浴したいと存じます。

耳をたつればなつかしや、あなたこなたの木がくれに、鳴く音をもらすほととぎす。

といふ詩がありますが、生活の全体にわたつて、隨時隨所に凡禿居士が、念佛念法念僧の法音をきかれた記録とでも申すべきものであります。未亡人の御住所は、盛岡市十三日町一六八、清水スノ様であります。

▽樹心録は、天動説から地動説に進んだ今、自我中心に固執してやまぬ我身を祖聖の御教に照らされて、且つは懺し、且つは慶ばして頂いたものであります。

○　夏期自照講習会紹介

時、八月二日晩より五日晝まで
所、京都市山ノ内、角坊別院
講師　広島文理大学教授　白井成允先生
　　自照舎主　足利淨円先生

会員五十名、会費參百円。男女を不問、七月三十日までに、住所、氏名　年齢、職業、宿泊希望の有無を記入して、京都市右京区山ノ内御堂殿町、自照舎宛御申込み下さい。

宿泊希望の方は二日夕より五日晝までの三日間食事付宿泊費として七百円納入しお米一升五合持參のこと。

慈光　第三卷　第七号　昭和二十六年七月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

昭和二十六年七月十日　印刷
昭和二十六年七月十五日　発行
定価　毎月一回十五日発行
一部金拾五円（郵税共）
一年分金百八拾円（郵税共）

名古屋市南区駈上町二ノ二八
編集兼発行人　花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人　本田政雄
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷所　千草印刷所
名古屋市南区駈上町二ノ二八
一道会館
発行所　慈光社
振替口座番号　名古屋一〇四七〇番